

## 光に惑う

山吹いなり（かわいあやの）

チャイムが鳴ったらインターホンをよく確かめた後に  
私はわたしを 用意するため  
真っ先に 散らかった部屋へ向かう

真っ白な壁に乱雑に貼られた付箋  
そこから 一番最適だと思っものを  
なるべく丁寧に皺を広げて 私は わたしを用意する

そうやって 生きている  
そうやって 生かされている

あの雲は自身が雲だと気付いているのだろうか

あの風は雲を運んでいる自覚があるのだろうか

あの鳥はあの木々はあの花はあの草はあの虫はあの言葉は  
今を渾身に生きることがなにも怖くないとでもいうように

全ての 無を 余白へと置き換えていく  
なんて恐ろしいことだろう

その 美しさに 心が震え  
こぼれ落ちる涙に理由をつけることが出来なくて  
こうしてここにいるのだけだ